

能登半島震災の復旧、支援活動の実際を学ぶ**～第 31 回社会保障学校を開催**

7月13日（土）、プラザホープ4FホールBにて、第31回和歌山県社会保障学校が行われ、県内の各組織から会場参加が23名、WEB参加が7名でした。

主催者の県保険医協会の三谷先生より「石川県の被災について、メディアも報じなくなり風化しつつある。マイナ保険証の導入によるトラブルなど、被災地で医療提供体制がどうなっているのかも聞いてみたい」と挨拶されました。

学習会のテーマは「能登半島震災の復旧の現状と支援活動について」で、石川県社会保障推進協



議会事務局長である藤牧圭介氏より、石川県輪島市周辺の被災状況と支援活動についてお話して頂きました。

藤牧事務局長より冒頭、能登半島地震の特徴として、「被害の8割が木造家屋」「高齢化率が高い地域（輪島47.6%）（珠洲（52.7%）が多く、災害関連死が現在も続いている」と、家族やコミュニティの崩壊で、被害状況について把握しきれていないとのお話がありました。またこの能登半島地震によって、東日本大震災の5倍という水道管が被害を受けましたが、「行政の支援での復

旧は水道メーターまでという限られた部分までしか行われず、水が出るようにするには自己負担になっている」とのお話でした。このように現在も復興とはほど遠い状況が続いており、石川県民医連では、被災地の方々に寄り添う活動をされていると報告を頂きました。

藤牧事務局長は、2000年代から地震が増えてきたにも関わらず、20数年前から被害想定が見直されてこなかった点や、公務員減らしなどの圧倒的なマンパワー不足、未だ原発再稼働に固執していることなど、政府の取り組みの甘さを批判し、被災地住民の声を活かした復興支援を行い、原発は廃炉し、災害に強い国作りを進めることが重要とお話されました。

学習会のあと、海南市の岡市会議員より、石川県の被災地への支援活動の報告を頂き、「観光でもボランティアでも実際に見に行ってもらい、自分で見たことを他の人に伝えて欲しい」と訴えました。

閉会の挨拶で、佐藤先生より、「和歌山と石川の立地を比較してみると、和歌山は紀南の方に民医連事業所がないので、災害時どう対応したらいいのかと悩んでいる。石川の事例を聞いて改めて医療のせい弱性を感じた。和歌山県の災害対策を聞いてみたい」とお話されました。

★会場参加者から、災害募金として14,900円が集まりました。

先の募金と合わせて、17,300円を藤牧事務局長にお渡ししました。